

大江健三郎の小説と〈女子大学生〉

——「救済」の手段としての〈女子大学生〉

金 キム

嬢 ヒヨーン

鏡 ギョーン

― はじめに

大江健三郎の「飼育」やその続編とも言われる『芽むしり仔撃ち』は、大江の初期代表作であると評されてきた。これらのテクストは、外部と隔絶した村を物語の舞台としているという点をはじめ、多くの点において類似しているのだが、その中でも重要な共通点として、女性の表象のされ方が取り上げられるのではないだろうか。すなわち、両テクスト共に女性の登場人物が「影に隠れている」、あるいは、自ら「語ることはない」存在として繰り返し表されている点が、大変興味深い。とりわけ、「飼育」では、主人公である少年「僕」と彼の「弟」、そして「父」が物語の中心に置かれている一方、「僕」の〈母〉は全く登場していないし、〈母〉に関する言及さえも見当たらない。そして、登場する女性たちすらも、存在感が非常に薄くなっていることに気づかされる。その上、

女性人物による発話も殆ど見られず、あつたとしても地の文の中で書かれている場合が多い。

ところで、このような〈母〉の不在や隠れている女性、語らない女性という女性表象の特徴は、この二作品に限らず、他の作品においても繰り返し見られるものである。さらに、「看護婦」や「女優」のように、類型といえるような女性人物たちが繰り返し登場している点にも気づかされるのだが、このような女性人物の類型の一つが、時には「女子学生」、時には「女子大生」と称される〈女子大学生²〉という類型である。初期作品に集中して繰り返し現れている〈女子大学生〉は、療養所（『黒いトラック』）、アルバイト先（『奇妙な仕事』、「死者の奢り」）、後退研究所、「敬老週間」、大学（『偽証の時』、「大人向き」）、個人的な体験）、学生診療所（『叫び声』）で、〈男子大学生〉たちに出会う。〈女子大学生〉たちと〈男子大学生〉たちは一緒に療養し（『黒いトラック』）、一緒に

アルバイトし、「奇妙な仕事」、「死者の奢り」、「後退研究所」、「敬老週間」、さらに一緒に大学時代を送り（「偽証の時」、「個人的な体験」）、恋愛し（「叫び声」、「大人向き」）、そして再会する（「個人的な体験」）。このように、初期小説に類出している（「女子大学生」）は、大江の小説、とりわけ初期小説の研究において大変重要な存在でありながらも、その重要度は十分に認識されないままである。その結果、大江の初期作品における（「女子大学生」）の位置づけは、いまだに本格的に行われていない。そこで、この論考では、（「女子大学生」）に焦点を当てて、（「男子大学生」）中心だった既存の研究では言及の少ない、大江の小説における（「女子大学生」）の意義を追求してみたいと思う。このような考察によって、大江小説における重要な特質である「女性」、「性」の問題にも、新たな示唆が与えられるだろう。

II 「憂鬱」で、「あまり笑わない」、「無口」な（「女子大学生」）

大江の小説において（「女子大学生」）はどのように表されているのだろうか。まずは、（「女子大学生」）に関する記述を確認してみる必要があるだろう。そもそも大江の小説では、（「女子大学生」）の外見などが詳しく描かれている箇所は殆ど見られない。その中で、いくつか外見が描写されている箇所を拾ってみると、一様に否定的な描写であることに気づく。

ヨルコは青い厚ぼったい皮膚の、大きい顔をしていた。眼が暗かった。そしてそれはおいたてられた小動物のような光りかたをした。（「黒いトラック」、八三ページ）

彼女の厚ぼったく血色の悪い皮膚は青いままで上気していた。（「奇妙な仕事」、一〇ページ）

僕は女子学生の厚ぼったい皮膚が黄ばんでいる広い顔を見た。顔一面に注意力が弛緩しているように、女子学生は疲れてだらけきつた表情をしていた。（「死者の奢り」、三三三ページ）

オフィスで、ぼくはこの背が高すぎる瘦せつぼちの女子大生が憂鬱から解放された表情をうかべるのを一瞬たりとも見たことがないけれど（「後退青年研究所」、九ページ）

憂鬱な彼女は（後略）（「後退青年研究所」、一一ページ）

その鳥のようにカサカサかわいた印象の女子大生と僕は、（後略）（「叫び声」、三〇〇ページ）

このようなネガティブな「女子大学生」の外見の描写と一脈相通ずる表象として、脚気に苦しんでいる「女子大学生」の様子も挙げられる。

脚気の新薬も飲んでいるし。(「奇妙な仕事」、一〇ページ)

Nはヨルコの脚気きみでむくんだ足について考えた。

(「黒いトラック」、八八ページ)

小説の中で、脚気で苦しんでいる「女子大学生」は、右に引用したように、「奇妙な仕事」の「女子学生」、「黒いトラック」の「ヨルコ」だけであるが、脚気について言及している作品はもう一つある。「死者の奢り」である。

白い光の中で、死者たちはじっとしていた。僕は彼らの裸の皮膚に天窓からの光が微妙なエネルギーに満ちた弾力感をあたえているのを見た。あれは触れた指に弾んだ反撥を感じさせるだろうか。脚気の腓のようにぐっと窪むのかな。(「死者の奢り」、二三ページ)

ここで、「死者の奢り」において脚気のイメージに連結された対象は、「女子大学生」ではなく、まさに死者である。

つまり、「奇妙な仕事」の「女子学生」や「黒いトラック」のヨルコのイメージは、「脚気」という病氣を通して「死者の奢り」の死者たちに重なっているのだ。

また、「あまり笑わない」という記述もしばしば目にすることができる。そのようなイメージが醸し出されている箇所を挙げてみよう。

ええ、私のような性格だと笑うことはあまりないのよ。子供の時だって笑わなかったわ。それで、時々、笑いたを忘れたような気がするとね。(「奇妙な仕事」、一一ページ)

(略)と笑わないで女子学生はいった。(「死者の奢り」、三三ページ)

とりわけ、「後退青年研究所」の「女子大生」は「異常に感じられるほど徹底した無口」な人であって、「殆ど自分の意見をのべなかった」ことから、「ミスター・ゴルソンの方でもこの女子大生をいくぶん煙たがって」(一一)いたと語られている。

このような「女子大学生」の表象は、「男子大学生」にとっては全く魅力的な存在ではないということが推測できる。むしろ

ろ（女子大学生）は、一応女性ではあるものの、（男子大学生）の性的理想像とはかけ離れた、特殊な存在のように思われる。

III 恋愛の関係における（女子大学生）

ところが、不思議なことにこのように憂鬱な雰囲気をかもし出している（女子大学生）は（男子大学生）の恋愛の対象としても描かれている。大江の小説のなかには、「僕の恋人」（「ガール・フレンド」）や大学時代の「女友達」である（女子大学生）が、（男子大学生）と性的な関係をもつ相手として登場する作品がある。それは「叫び声」と「大人向き」、そして「個人的な体験」だ。「叫び声」の「女子大生」は「僕の恋人」、「大人向き」の「女子美術学生」は「ガール・フレンド」、「個人的な体験」の「火見子」は「僕の女友達」だとそれぞれ紹介されている。「火見子」は「鳥」の大学時代の友だちであり、七年後に再会してからの話が主な物語内容になっている。彼らは恋愛感情を持たず、かつての大学時代においても、現在においても、肉体関係だけで結びついている。

『叫び声』の「僕」が「ダリウス・セルブゾフに紹介してくれた医師のところ」で、初めて「女子大生」に会ったとき、彼女から受けた第一印象は、「鳥のようにカサカサかわいた」（三〇）というネガティブなものであったし、また、「狂信家の眼を輝かせた女子大生」や「下品に顔じゅうを充血させ」、

「嘆れ声」（六三）といった描写さえある。「個人的な体験」の「火見子」は、「鳥」の大学の「女子学生たち」みなが、「結婚すれば離婚したし、就職すれば餓になったし、なにもしないでただ旅行をしていた者は滑稽かつ陰惨な衝突事故に出くわ」（二四二）すといった不幸な人生を歩んでいるのと同様、「卒業まぎわに大学院の学生と結婚した」のち、「離婚はしなかったけれども、もっと悪いことに」（二四二）、結婚後一年で夫に自殺されてしまう「不運」な存在なのである。このような（女子大学生）に関する記述は、「可愛いという感じ」、「家族的雰囲気」、「センス」、「エロチシズム」、「可憐さ」のどれからもかなり距離があるイメージであって、（男子大学生）と性的な関係を持つ恋愛対象としては、全くふさわしくないように思われる。

しかしながら、このようなネガティブなイメージが持たれ、また理想の女性像からも遠い（女子大学生）が、「叫び声」や「大人向き」において、（男子大学生）の恋愛の対象になっているのだ。では、それぞれのテキストにおける彼らの付き合いの様子は、どのようなものだろうか。

IV 「助けてくれる」存在としての（女子大学生）

『叫び声』の「女子大生」や「大人向き」の「女子美術学生」、は名称の上では「僕の恋人」や「ガール・フレンド」

ではあるものの、前述の通り、愛の対象という感じはしない人物である。それゆえに、『叫び声』の「僕」と「女子大生」の恋愛が、「僕」自身が述べるように、「つねにいじけひねこび、まがりくねって迷路のように展開した」(三二)「クロスワード・パズルのような恋愛」(三二)であったことも当然だと思われる。「僕の恋人」の「女子大生」は、「議論ずきな勉強家」(四〇)であり、二人の関係は、「僕と女子大学生との変則的なプラトニック・ラヴ」(六二)と表現されるが、二人の間では「議論だけは性的なテーマをしないで展開させて、性交の細部にわたってもいた」ものの、「恋愛がずいぶん進んできていた」時にも「接吻ひとつおこなわれたことはなかった」のだ。しかも、たった一回だけ行うことができた彼らの性交は、二人を満足させない「不愉快で、厭な」(六二)ものであった。その経験に関して「僕」は、「ひとつのおかしな体験」(六二)、「変則的なプラトニック・ラヴ」の「きわめて変則的な実のむすびかた」(六二)という風に語っているのだが、翌日、「女子大生」は手紙で別れを告げることになる。

それでは、「僕」はなぜ、あまり魅力的ではない対象と、「変則的な」恋愛を始めたのだろうか。「僕」と「女子大生」の恋愛が始まる場面を確認してみよう。

僕は梅毒恐怖症からの回復の証拠としての解放感を是が非でもあじわいたいと思っていたので、いそいそとその女子大生と恋に落ちたのだったが(『叫び声』、三〇ページ)

「僕」が「女子大生」に出会う場面を見てみると、感情のドラマチックな変化や、「女子大生」に対するポジティブな記述は全く見られず、ただ、前述した、「カサカサかわいた印象の女子大生」というネガティブな描写だけが行われていることに気づく。そして、「僕」が「女子大生」と「恋に落ちた」理由を、「梅毒恐怖症からの回復の証拠としての解放感」を味わいたい気持ちからだと述べる。つまり、この小説において「女子大生」は、「僕」の嵌まった問題から、「僕」を助けてくれる存在として位置付けられているのである。

このような、ある目的意識をもった恋愛は、「大人向き」の場合においても同様である。「大人向き」の「僕」は「ガール・フレンド」に関して、「恰好な」という表現を使っている。

「僕も五月祭の繪畫展で恰好な女子美術學生と出會い、たまちち性關係をもつたので、僕にはもう性欲の危険な暗闇に足をすくわれるおそれはなくなつた。」(『大人向き』、

とができるのだった。(『個人的な体験』、二四三ページ)

「出世主意のランニング選手」に喩えられ、「大蔵大臣」を指す「法學部の學生」の「僕」にとって、「ガール・フレンド」は、勉強に専念するために必要な、性欲の解消を助けてくれる手段に過ぎない。そして、「そのガール・フレンドが名門や富豪の娘である場合は別にして、軽率に結婚の約束をしてみましたり、スキャンダラスな深みにはいりこんでしまつたりしない」(二五二)という語りに如実に表現されているように、「僕」は「ガール・フレンド」と真剣に付き合う気など、最初から持っていなかつたのである。

『叫び声』や「大人向き」の「男子大学生」を助けてくれる存在としての「女子大学生」の設定は、『個人的な体験』の「火見子」でも全く同じである。生まれてきた赤ん坊に脳ヘルニアという脳の異常があることを知って、「鳥」は狼狽し、方々をさまよう。そのとき、逃げ場所を選んだのは、「火見子」という大学時代からの女友達の所であつた。赤ん坊の死を願うという個人的問題に自閉しながらも、性的に自由奔放な「火見子」の世界で、一時的に落着こうとする。鳥にとって、「火見子」は感情的な安らぎを与えてくれる存在である。

鳥はこの女友達の前でいつも自由かつ自然にふるまうこ

山田有策は「火見子」という人物について、「大江健三郎の全作品の中でも最も強烈なイメージと存在感を有している」と評する。「名前や出生が彼女の守護神的なイメージを与えて、夫に自殺された後神秘的な瞑想とスポーツ・カーの両極をふれ動くという行動がそのイメージをより増幅させて、物語における主人公(鳥——論者)との関係を通して圧倒的な存在感を確立している」上に、とりわけ二人の人物の性行為は、「火見子の鳥に対する無私とも言える献身」、つまり「守護神的な面貌」を表しているとし、「火見子」を「救済」のイメージを帯びた存在として位置づけている。¹¹⁾

Ⅴ「救済」の手段としての「女子大学生」

当面問題としているこの三作品中、『叫び声』と『個人的な体験』においては「女子大学生」による「救済」を確実に指摘し得る。そこで、この二作品を中心に、「女子大学生」が媒体になった「救済」について考えてみたいと思う。

ところで、「救済」という言葉自体が「あるところから、他のところへ」という方向性をもっている点を考えると、『叫び声』の「僕」や『個人的な体験』の「鳥」がどのような状況から、どのような状況へと「女子大学生」たちによつ

て導かれていくのかを考察しなければならぬだろう。

まず、『叫び声』に色濃く現れている「不能者の感覚」は、高校時代に一度だけ「高校生専属」の「娼婦」を買ったときから、「僕」がおびえ続けてきた「梅毒恐怖」に由来する。そういった「僕」にとつての「救済」というものは、「梅毒恐怖コンプレックス」の「追放」(三三〇)を意味するだろう。『個人的な体験』の場合は、「畸形の赤んぼうを正面からひきうけて生きようとする人間」を描くものであるため、「鳥」の「救済」の方向は、「畸形の赤んぼう」の問題の決着であると思われる。これらがそれぞれの作品における第一の「救済」の方向である。

両作品の〈女子大学生〉は、ともに〈男子大学生〉を助ける任務を忠実に果たしている。「発情した処女の女子大生と強姦されるように性交するまで」は、性交ができないと思つていた『叫び声』の「僕」は、「女子大生」との性交——「ひとつのおかしな体験」(六二二)——を通して、「梅毒恐怖症からの自己解放に一步をすすめた」(六四四)のであったし、『個人的な体験』においても、「畸形の赤んぼう」の問題で苦しんだ「鳥」は、「火見子」から慰安を得、「赤んぼうの処理」の問題を解決する過程に協力してもらう。

しかし、ここで注目したい点は、両作品、とりわけ『個人的な体験』の場合において〈男子大学生〉が〈女子大学生〉

に求める「救済」は、〈男子大学生〉の抱えた問題それ自体に直接関連しているというより、一時の性的安らぎを提供する存在、いわば「娼婦」の役割に近い印象を受けるといふことだ。石原千秋は、『個人的な体験』の「鳥」と「火見子」の性交を単なる性交ではなく、「自己救済のプロセス」と見なし、「火見子」という登場人物を、「鳥を性の「成熟」へと導く案内人」として規定した。そこで、彼女の役割は、「惨めさや敗北や嫉妬や、そうしたあらゆる人間の醜さを孕んだ性交を引き受けること」に他ならないと評した¹⁾。性を媒介に〈男子大学生〉を成長、または成熟させる「案内人」としての〈女子大学生〉、彼女たちのこうした機能は、まさに「娼婦」の役割ではなからうか。恋愛において、〈女子大学生〉は〈男子大学生〉と同等な立場をとらず、「救済」のイメージをもとに、ただ彼らの性的手段になっているのではないか。こういった〈女子大学生〉の位置づけは、〈男子大学生〉にとつての第二の「救済」の方向においても同じである。

『叫び声』と『個人的な体験』、両作品に表われている第二の「救済」は、日本脱出への願望と関わる。そもそも『叫び声』の主な物語内容自体が、日本脱出を夢見る日本の青年たちとアメリカ人ダリウスとの共同生活に関するものである。そして、「友人たち号」の完成後に彼らがヨットで出発

するつもりであった行き先は、アフリカであったが、結局、ヨットは完成せず、彼らが乗りまわした車の「ジャギユア」さえもダリウスの失敗と共に売り払われてしまうのである。即ち、日本脱出の夢は水泡に帰してしまふ。

ところで、日本脱出を夢見る青年たちの物語である『叫び声』において「女子大学生」は、身分的には「呉鷹男」や「虎」のような「日本の青年」であるものの、彼らの共同生活から排除されている。それは友人たち号のメンバーからの排除にもつながる。いいかえれば、「女子大学生」は一緒に日本脱出を図る仲間、つまり、「自己救済の主体」ではなく、ただの「自己救済の手段」にとどまるのだ。

興味深いことに、『個人的な体験』の「鳥」が地図を購入し、お金を貯めていつか向かおうと願っているのもアフリカであるが、「鳥」のアフリカへの夢も他の小説の「男子大学生」と同じく、「女子大学生」を排除した「鳥」一人の夢であった。その中、「火見子」自らが「鳥」の夢に勝手に入り込もうとする。

「私は、あなたのアフリカ地図に夢中よ、鳥。離婚して自由な男になった鳥とアフリカへわたって、あの地図をロード・マップに使いたいわ。わたしは昨日、あなたが眠ってしまっただけでアフリカの地図を眺めていて

熱病にかかったのね(略)」「個人的な体験」、三四七ページ)

「火見子」は「鳥」とアフリカへ行く夢を抱き始め、そのために自分の手をも「汚す」ことを決心する。そこで、「わたし」ではなく「わたしたちの手」を汚すのだと強調する。そのような火見子にとって、アフリカの地図は「鳥」と自分を結びつける「なかだち」(三四七)という意味を持つ。このような点を考えてみると、「鳥」が自分に求めているものが何であって、「鳥」にとつての自分が何であるかに関しては、「火見子」自身もよく分かっていたようだ。つまり、二人の関係が「単に性的な結びつきにすぎなくて」(三四七)、「火見子」は、「鳥」が「不安と恥辱感になやまされているあいだの、性的な急場しのぎにすぎなかった」ことを感知していたのだ。

ところが、昨日の夜わたしにもアフリカ旅行への情熱がたかまつてきているのはつきりしたの。いまではわたしたちは、新しくアフリカの実用地図をなかだちにして結びついているわ、鳥。わたしたちはもう単純に性的なだけの場所からもっと高い場所へ跳びあがったのよ。
(『個人的な体験』、三四七ページ)

「単純に性的なだけの場所からもっと高い場所へ」跳びあがりたいたいという願望は、「火見子」が「ずっと望んでいた」(三四七) ことであるが、しかし、「鳥」は結局アフリカへの夢を放棄してしまう。それは、「逃げまわって責任を回避しつづける」(三六七) ことをやめる決心をした「鳥」が、「赤んぼうを大病院につれ戻して手術をうけさせる」(三六六) ことを決めたためである。「すでに若さを費いつつある年齢の限りなく寛大で優しくおだやかなタイプの火見子」(三六八) は、そのような「鳥」に、ついには「さようなら」を告げ、「鳥」と決別するようになる。

VI 〈男子大学生〉の夢から排除されている〈女子大学生〉

ここで、「叫び声」や「個人的な体験」における「救済」というものを整理してみよう。それぞれの作品に表されている「救済」の出発点は、第一に「梅毒恐怖」や障害児の赤ん坊に関する問題であり、第二に日本という国であった。そして、救済の目指す方向は、第一にそれぞれ恐怖や問題からの解放、第二に「ここより他の場所」(「叫び声」、「個人的な体験」の場合は両方ともアフリカ) になるわけだ。日本脱出の夢は両作品とも水泡に帰してしまいが、「梅毒恐怖」や赤ん坊の問題に関して、それぞれの〈女子大学生〉によって「救済」が行われる。「叫び声」の「女子大生」や「個人的な体

験」の「火見子」は、「救済」のイメージを持った人物として登場し、〈男子大学生〉たちを助けることを彼女らの使命として担っているように見えるのだが、しかし、〈女子大学生〉が果たす役割は単に性的なレベルにとどまり、娼婦の役割と区別がつかない。また、彼女らは、「救済」における「案内人」ないしは「救済」の道具にとどまり、行為の主体からは排除されていることが確認できた。したがって、恋愛や性的関係における〈女子大学生〉は、〈男子大学生〉の愛の対象ではない。

だからこそ、「火見子」が「鳥」に「さようなら、鳥！」と告げるのは大変意味深い。このような言葉は「個人的な体験」の最後において、「鳥」が現実(障害児の赤ん坊)を直視するようになり、他の作品で繰り返されていた逃避をやめるといふ、「鳥」の決意の表れである。つまり、今まで逃げまわり続けた〈男子大学生〉を支える〈女子大学生〉の存在理由が、ここでなくなってしまうのだ。そして、この「鳥」の態度の変化こそが、いわば、〈女子大学生〉による「救済」が実を結んだ結果であるといえるだろう。

「鳥、あなたはいろんなことを忍耐しなければならなくなるわ」と火見子が鳥を励ますようにいった。「さようなら、鳥！」(「個人的な体験」、三六八ページ)

「男子大学生」との決別においても、「女子大学生」は「鳥」の未来を心配する救済者そのものだ。二十歳から七年を経た後の「鳥」と「火見子」の再会は、「女子大学生」に頼ってばかりだった「男子大学生」が「女子大学生」から独立することによって、彼の成長や新しい世界への進出を描くための必然だったと思われる。そして、「個人的な体験」におけるこのような結末こそ、この作品と以降の大江の作品とを分ける目安になると考えられるのである。

注

1 当時の他の小説同様、大江の小説は女子の大学生の中でも女子大学に通っている学生を「女子大生」、男女共同の大学の学生を「女子学生」と表記する傾向が見られる。

2 本論文で、論者は言葉使いの混同を防ぐため、「女子大学生」をメタ言語として導入したいと思う。また、同じ理由から、「僕」や「ぼく」、あるいは専攻名（理科生、文科生）か渾名（鳥）で称される主役の男子学生のことを、「男子大学生」とする。

3 現在も執筆し続けている作家の作品を、初期・中期・末期のよな図式によって区別することは、簡単な問題ではなく、初期作品の定義だけに限っても、研究者によって様々な意見が提示

されている。しかしながら、大きくは、処女創作集に収録された作品群を初期作品と見る立場と、より広い視野で大江の作品の雰囲気が大きく変わる「個人的な体験」までを初期作品として定める立場の、二つに分かれていると思われる。論者は後者の立場に従って初期作品を定義するが、その根拠については本論を通して究明したいと思う。

4 大江の初期作品の中で「女子大学生」が登場する主なテキストは、「火山」（学園）一九五五年九月、「黒いトラック」（学生生活）一九五六年七月、「奇妙な仕事」（東京大学新聞）一九五七年五月、「死者の奢り」（文学界）一九五七年八月、「偽証の時」（文学界）一九五七年一〇月、「後退青年研究所」（群像）一九六〇年三月、「叫び声」（群像）一九六二年一月、「大人向き」（群像）一九六三年五月、「敬老週間」（文藝春秋）一九六三年六月、「個人的な体験」（講談社、一九六四年八月）の十の小説である。

5 アルバイトを題材とした物語にアルバイト学生が二人以上登場している時は、「女子大学生」は必ず主人公の「男子大学生」のアルバイト仲間として登場する。

6 現在までの大江に関する研究は、大江とサルトルとの比較研究及び大江のサルトル受容の仕方を解明する研究を除けば、その多くが「監禁状態」を軸として書かれた傾向が強い（川口隆行「大江健三郎「飼育」論——「身体」を軸として」『広島大学日本語教育学科紀要』一九九五年三月）。そして、登場人物に着目する場合があったとしても、それはあくまでも「作品の中心人物・語り手（＝「僕」）に焦点をあてた上でのものが多かった」

7

〔山下若菜「死者の奢り」論——女子学生の位置〕『日本文学研究』大東文化大学、一九九二年二月)し、また、女性登場人物の存在を言及した先行研究の場合でも、〈女子大学生〉は物語において必然的な存在ではないという評価が支配的だった。

その中で、大江の初期作品を対象に、女性表象を問題化した論考としては、栗坪良樹「大江健三郎の最初の夢——「奇妙な仕事」の女子学生」(『評言と構想』、一九七〇年一月)、山田有策「大江健三郎「個人的な体験」の火見子」『国文学解釈と教材の研究』臨時増刊号(一九八〇年三月)、篠原茂「大江健三郎——母の役割を果たす父」(『国文学解釈と鑑賞』、一九八〇年四月)、岩谷征捷「大江健三郎、初期作品における〈女〉の役割」(『昭和文学研究』、一九八五年七月)、山下若菜「死者の奢り」論——女子学生の位置」(『日本文学研究』大東文化大学、一九九二年二月)、趙美京「〈主体〉と〈他者〉の戯れ——または、『偽証の時』の〈本物〉と〈偽者〉の戯れ——」『文学研究論集』(筑波大学文学研究会、二〇〇二年三月)、Siganos, André. "L'image de la Mère chez OE Kenzaburo." *Espace de Femmes* 21. (2004) Centre de Documentation Franco-japonais sur les Femmes などがある。しかし、ほとんどの先行研究が個別作品の研究に過ぎず、初期作品群全般における〈女子大学生〉に関する研究はまだ行われていない。

8

引用は、基本的に「大江健三郎全作品」(新潮社)を参照する。ただし、「大江健三郎全作品」所収外のテキスト(『火山』、『黒いトラック』、『大人向き』)に限っては、それぞれの初出を引用する。

9

そこで、厳密にいうと、「火見子」や「鳥」は現在において大学生ではないわけだが、彼らの関係が大学時代の友だちという過去の時点で成立している点、そして、再会した現在においてもその関係が維持されている様子が見られる点を考えると、彼らは、かつての〈女子大学生〉や、かつての〈男子大学生〉と見なせる。よって、この論考では「火見子」や「鳥」を、〈女子大学生〉や〈男子大学生〉と称することにする。

10

「叫び声」、「大人向き」の「僕」や「個人的な体験」の「鳥」は、おそらく東京大学の学生と推定される〈男子大学生〉であるが、ちょうど、一九六二年二月号『婦人公論』には、「東大生の現代女性批判特集——東大新聞部有志がつくる学生総動員新企画記事」として、「入学間もない教養学部の学生がクラス雑誌に吐露した純情でナイーブな女性観を分析する」試みが行われている。その筆者の一人である池内信次(一九六二年当時、教養学部文科二類二年)は、「駒場の青春に見る女性像」という見出しで、理想の女性像をまとめてゐる。

11

山田有策「大江健三郎「個人的な体験」の火見子」(『国文学・解釈と教材の研究』臨時増刊号、一九八〇年三月)、一九一ページ。

12

「大人向き」の場合は他の二作品と異なって、「僕」が「ガール・フレンド」に求めるものは、「救済」とは言えず、単なる性欲の解消に過ぎない印象を受ける。

13

石原千秋「反転する帝国——大江健三郎「叫び声」「個人的な体験」(『テキストはまちがわかない』筑摩書房、二〇〇四年三月)、一三二ページ。

「鳥」の成長は、最後の場面において、以前は彼を信頼していなかった義父から、「きみにはもう、鳥という子供っぽい渾名は似合わない」(三七〇)と言われることから、明らかである。